

く
朽ちた
はびこ
蔓延る

山内晶

[朽ちた蔓延る]

○登場人物

- 一、王様（とある権力者が砂漠にお墓と宮殿が混ざった建物をつくり、死ぬ）
- 二、左官屋（墓宮殿でおまつりがはじまった）
- 三、王様の末裔（墓宮殿で王様の末裔が暮らしている）
- 四、市民たち（墓宮殿から王族がいなくなって共和制になった）
- 五、異教徒（ヨーロッパ圏の外国人の目線で、最盛期の墓宮殿）
- 六、歴史学者の妻（廃れていく墓宮殿。歴史学者が歴史を探る）
- 七、元地元民の墓泥棒（墓宮殿はある事件以降廃れてしまった）
- 八、日本人観光客（遺跡になった後の墓宮殿に日本人観光客が訪れる）
- 九、お墓の亡霊（声が集まってとぐろをまいた）

○概要

架空の遺跡を、声と身体をつかって建築したいとかがえました。

現代を生きていると遠くのことがスイスイ指先で見えます。

しかし自分はどこにいても目線が移動しているだけ、一方向からしか見据えられないのだと、逆説的に感じる事が多くあります。

自分の魂を揺さぶった小説がアマゾンの評価で「安っぽい表現で読む価値がない。がっかり」と書かれていました。

ゴミ屋敷の持ち主が「懸賞を集めるのが生き甲斐、懸賞のために集めたビール缶と当てた懸賞品が増えていったんよ。……あ、これ、2年前のあれだ。懸賞！いいでしょう？」と言って、（私にはゴミに見える）ブリキの何かを差し出し、報道クルーが困っていました。広告業界では、会議でトレンドと判断した事象（少子化、LGBT など）をわざと嘲笑的に取り扱い、傷ついた人間に商品検索ないしはSNS 発信させるという広告手法があるそうで。心を傷つけて生まれた金が、誰かを生かして幸せにしています。

その時に、私にとっての宝物も正義も、文化と指針のちがう人にはゴミなのだと感じました。

愚かな我々は、自分の宝物風のゴミを自分以外も宝物と思っていると勘違いしながら愚かに歴史を刻む、もしくは刻んで来たのかもしれない？ 4、5、6種類の正論風のイデオロギーがぶつかり合う瞬間は可視化されて、日常的に見るようになってきました。

理解できないものが多様化するほど、世界ちょーひろいと肌感覚が伝えてきます。

絶望はしませんでした。ロマンを感じました。

遠近軸だけでこんなにひろいなら、時間軸も一緒に考えるとひろいなんてものではない…この体感を文字に起こしたいと創作を始めました。

この種類のロマンを具現化するために注目したものが、「建造物の諸行無常」「長い目で見た文化の隆盛」「残留思念」です。

建造物は、できて、栄えて、衰退して、死んで、遺跡になる、もたらす意味はどんどん変わりエピソードの蓄積だけが意味を継承されないで残る、と捉えてモチーフとすることを決めました。

次に文化の隆盛は。特殊な一説によると、日本は清流が多く着物を頻りに洗える環境にいるため、大陸の民族衣装に比べて生地が薄いのだそうです。シルクロードの民族衣装は洗わないで着続けても見苦しくならないように刺繍が多いとも言われています。そういった成り立ちの違いによる、現在につながる違いを知ると、悠久の日進月歩を感じました。モチーフとします。

また逆に「1人の異性と結婚して幸せ」と日本を覆う圧力は、江戸時代にはなかったそうで。明治維新か西洋文化の流入なのか、どのタイミングでこの慣習が現れたのかはまだ知りません。常識は恒久的なものでなく誰かに塗り替えられているのか！とモチーフとすることを決めました。

そして残留思念は。たとえば受験前の定番観光地、学問の神様・菅原道真が祀られた北野天満宮は道真の怨霊が蔓延り天変地異が起りまくり生きている人が怯えて、鎮魂のために建築されたそうで。建てられたときのニュアンスといま訪れる人のニュアンスがあまりに違った建築です。残留している望みや後悔があったら、無視をされているけど道真は懲らしめない。

遺跡には、私の思う世界の幅広さと悠久のときが圧縮されているように感じました。

そして作品の中で何が言いたいかは、まだ一言ではまとめられていません。まとめられないから戯曲を書いているのかもしれない。けれども正論風の世迷言がはびこる現代で、言葉に傷ついてクヨクヨした人を、正義は手作りだ誰もお前を罰さない、とマッチョに全肯定したいという欲望があります。

以上のことを、韓流ドラマばかり見ている私の母親にも届くように、厭世的になりすぎないように、インドのバラナシ※の体感を目指して、形にしました。

※ ガンジス川の、沐浴のメッカ。カオスが体感できるので評判。死体を火葬して流す、死体の貴金属を盗る人間が泳ぐ、排世をする、神聖な場所として沐浴する、それらが同時。

九、

ひと

…お墓の亡霊

話しかけている相手…

亡霊

あなた。あなた。あなた。あなた。ようこそ。

私はあつまるこえ。誰にも届かない群。

もうここにいたいのか溶けてしまいたいのかわからないよ。

はじめからいた。あとからきた。途中から混ざった。ちかごろ。急に！声、

べっとりこの建物にくっついたまま離れられなくなった。迷惑？

前も上も下も、ひゅんひゅんと声が塗り重なっていたら、うるさい？

ねえ。ねえ。ねえ。ねえ。……ああ。

声は誰にも届かない？

この死んで行く建物も、走り回るぼくらを覆い包むだけだ。

建物。ぼろ。劣化。意味が重なって死にかけてない？できた瞬間から滅び

に向かいながら、同じ場所から淘汰をながめて通り過ぎる人の感情を蓄積

し続けていた建物。どっつ……ああ。

教会がオルガンを弾かないように、モスクがアザーンをうたわないように、

寺院が御経を読み上げないように。物質に意思はない？

おおきすぎるものを、あなた、完璧には認識できない？

生まれたら死ぬ。いつか。

あ。

あなた。せめて慰めて！あなたを責めることはないんだから！

ねえ

きこえ

八、

ひと

…日本人旅行者

話しかけている相手…

旅行者

ども。あたしです。

遠くを………ここにしまして。

ここ。朽ちた遺跡だったみたい。

私、さっき、だくだくと滴る汗をたらしながら、うらうらと目的もなく獣道を歩いていたんですが、荘厳とも巨大とも神秘とも形容できそうな、周囲の景色に溶け込むことも馴染むことのできななさそうな建造物が、目の中に飛び込んできたので、私、手を無意識に動かしましたよ、触ってみたい、と強く思ったんでね。あれはどんな要素で構築された建築だろう？知識欲がガソリンになりました。鬱蒼なんてもんじゃない茂みをかき分けました。

そしたらもう最高でした。

足がぬかるみにとられ、枝を折った手が樹液でべたついて、鼻も手も耳の周りにも虫がブンブン飛び交って、新規なのか常連なのかわからない虫がブンブンとここは日本じゃないんだぞーと毎分毎秒私に注意喚起をしてくれました。

そっか、ここ、日本じゃないわ。私、今異国にいる実感を持っていました。

いやー、やっと気分が巻き返せた気がしています。

いやいや、今しがたのさっきにギヤーン！と喧嘩をして離別した友人とは旅の価値観が合わないなあ、と薄々わかっていたんですけど、ウスウスがグツグツになると我慢はできないものですよ、やつらは外国が日本ではないと、頭でしかわかってないんです。値切るなんてみっともないとか？韓国人だと思われたくないとか？物乞いに物をあげると良くないとか？うるさいなあって思っ！

えっその価値観はあまりにも国産じゃない？日本のフィルターをかけた

予定調和の旅は虚しくない？私！五感を大陸にさらしたくて、大枚をはたいてるんですけどー！だいたいさあ！そっちがついてきたいとかいうから無理言ってオプシヨンとか追加で頼んだのになんで被害者ヅラなのよ、うん、ぬん、かん、ぬん。

あついですね。露店で買った馬鹿でかいペットボトルを取り出し、「ぐくぐく飲みますね。

あ

あちゃあ、外国の安いボトルはいろはすとサランラップを足して2で割ったようにペシヤンペシヤンで、勢いよく地面に水をぶちまけてしまえますね。

おろろ。

……え？

地面が床に変わっていたことに気づきました、床には巨大な魔法陣がありました。私は魔法陣の下真ん中に立っていました。……これ、物語的にちよっと、やばい予兆ですよんげ。

え、え、え、えいやさ——とワンジャンプしますね。

あ、よかった。なにもおきないです。かなりホツとしましたね。

じゃあ橋。あるいてみますね。わたってみます。

橋を渡るというのは、とても面白い作業で、視界の遺跡は歩きたび大きく、大きくなっていった。

というか。途方もなく大きくないですか？大きいです。縮尺と遠近が狂いつづけて、頭がグラングランです。エフエフみたいドラクエみたいアサシンクリードみたいあっち側に辿りつかないんじゃないかって思うくらい。ファンタジーな世界観の、このドでかい遺跡のせいで、自分が現代を歩いているのか大昔に向かって歩いていっているのかあやふやになってきて、手の中にある 아이폰が私をこの時代に引き止めてるって感じています。

場にそぐわないんじゃ、と不安になったときはガイドブックね。216ペ

ージの右下。写真と同じ建物が目の前にありましたよ。

が美しく、ハートマークつけたい！

あの「湖」は、Hの湖って言う、な、名前。

まあ、なんてロマンチックなんでしょうね。

とかなんとか？ぼさーっと話すけど、ねえ、爺さん。あなたさては、ダウナー系の麻薬がガンギマリしてない？ふるえてるの。おっそろしやね？

ここはあの事件以来落ちぶれて。見る影も無いらしいのよ。あの事件というもの自体を私は知らないやあ。

おいたわしいおいたわしいわしい、何も知らない人間が勝手にこのの場所をたどった見回して汚していくんだあ。

とか、ワジワジと顔を洗つような仕事をしながら言っているね。皮膚がパラパラ落ちるね。

いや、じいさん、私には美しいよ、人の目は1通りじゃないの、と我ながら陳腐な言葉をかけるとね、くしゃ、と浅黒い顔をシワだらけにして笑ったよ。

はっしれ

じいさん、どこに行くの？意味深な言葉を残してどこ行くの。どうして？

……。

邪魔者がいなくなった！鳥が鳴いて虫が飛び交ってんなあ。木漏れ日が遠くにあってここにあるなあ。てぎわりのあるVR。のどかだ。いい侘しさだ。

少しうらうら歩きましたよ、建物の真ん中にある、モスクのようでモスクじゃない造形の建築にたどりつきましたよ。

見渡すの。

天井の一箇所だけかけた部分。そこから一筋だけ光が差していたので、光の輪っかに寝そべってみました。どろりと、体を液体のようにして。

ゆびでなぞる。私に手に触れているこれ、石。

長い私の髪、絨毯になって。ここだけ確かに私の陣地ね。

さみしくて、ほっとする。

私、わたし、私、ここにいていい？私、親の愛情に恵まれなかった。気の毒におもってほしい。許されたい。

「寂しい」を思い浮かべる時に日だまりの中にいるのは、きっと私くらいだろう。そんなわけもないのに！強く思った。そうか、世界で自分が一人だと気づきたくなくて、私はたびたび奇妙な空想の中に引きこもってきた。ここを、見渡させて。

壁も床もがツルツルしてる。見上げると、まっえ。頭のはるか遠くに柔らかな色の絢爛豪華な天井絵。

壁になんだか、たくさんの古代文字がかわいらしい模様をつくりだしている。

見渡す。

神様がいる場所。静寂。

……とろけてねむりそう。あたたかい。

静寂。空想が湧いてくる。天使が踊りを踊っている。

旅行者

ひんこんな想像力。

うつろ。だ。幼い頃から蓄えてきたこのおしっこくさい孤独を、私は日本から、空を飛んで、この知らない場所に持ってきた。逗留した孤独は、ここに根付くの？

私はきつとここにもそぐわないの。写メを撮る気にもならないの、ここは幸せが積み重なって、価値の高い福音とか、祝福とか、喜びの歌を蓄えた場所だったんだらう。その事実にも、身がすくむ。

あ！天井から差す光が無数のオーブを作り出してる。

ここがこうなるまでに、どれだけかかったのか、私が知るわけもなく、泣いた。

この涙も乾けば、雨になって流れ出して、あのきれいな湖に溶けていく？せせらぎの音が聞こえる？いまも湖が遠くまで透き通っている？キラリ

と水面の反射がゆらゆらとしている？

ここ汚してしまった？とりかえしが見つからない？

ごめんなさい。

七、

ひと

…元地元民の墓泥棒

話しかけている相手…

泥棒

取り囲む世界にメッタ刺しにされる前に俺の手を取ってどこかに助け出してください。だれか。

だって。あれ？と思ったら息ができなくて。覆われていて。なに？なにに？と思うと、あ、水か。水だ。水で息ができない。と思って。水に殺される前にもがいた。もがいて、ざぶっ。と跳ね起きた。吸った。命。は吸わないといけなかったんだなーと気づいて。それでも生きたかった。なんで生きたいか、までは考えるなよ馬鹿野郎死にたいのか。

濡れた体。で橋のフチから這い出て、魔法陣の形をした、あの、レリーフの上に寝転んだ。偶然ってあるなあ

そっだ、偶然、たまたま、さっき人を殺した。うわー！と思った。ここまでは歩いて来た。僕が育った街。は住む人間が絶滅したので、来るたびにさびれて、さみしい。あの死んだ、妙に小ぎれいな老婆。誰？「その指輪をどうするの？」後ろから話しかけられて、いきなり掴みかかってきた。物取りだ、目が怖かったんだよ、悪いやつだったし、だから思い切り蹴飛ばした、ら、死んだ。「その赤い指輪をどうするの？」なんで死ぬの？人は殺したらいけないのに。なんでこうなってしまったんだろう。

あ、あれ？手の中にあつた赤い指輪は。

なんでここにいるんだっけ。

なんかやだな、ベタベタするな。手が洗いたい。

あ、手が洗いたかったから水に入ったんだ。とりかえしがつかない。光がないから、手はまだ見えない。暗い。夜明けはいつやってくるかな。はじ

まりの朝が待ち遠しい、だっていまはまだ夜が昏くくて、耳にシーーーー

ーーーー音しか聞こえない。湖に光も刺さない。爛爛らんらん爛爛として

いて血管、切れそう。とっさに、俺は、右。右回りに、あつちにぐるっと。動くことにきめた！

足音。がザクザクうるさい。虫が、まとわりついて、ウゾウゾする。新しい命が日々生まれているんだなあと感慨深くなって、湖の中をのぞいた。この町のほとんどは水の中に沈んだのでこの間まで陸だった場所も、触ろうとすると手が水に濡れる。過去に触れようとすると手が濡れる。

これは浸食だ。外から来た強い生き物が、元からいた弱い生き物を食べて、自分のものにしてしまう。西洋の常識が流れ込んで来て、漂白剤を巻いたように、整理整頓だ。清潔は気持ちがいいし、正義がまかり通らない世界では子供の生きるモチベーションは上がらない。優しく助け合う必要がある。加害者よりも被害者の方がよっぽどいい、昔常識だったことは今は違う。

お。なんでこっちに歩いて来たんだっけ？

でも止まらない止まると、パパの言葉が頭をずっと駆け巡って、蓄音機の針がギザギザ動いて、やばい。

昔は良かった、嫌いな人が、不愉快が頭を動かした、正義とか、因果の報とか、しらん。

……大丈夫だ。まだかれるが。殺持オネとじもとせ、巻糸夜中オネのケケ。

パパの怒り。僕にはのみこめないのに、脳みそに垂れたインク、言葉が染み付いた。価値観が、つきまとして人工衛星みたい。ウゾウゾ。

あ、宮殿の裏門だ。でも目的の場所にはまだたどり着かない。

くぐる。くぐりたくない。なんだ？寒気。あ、水に濡れた体が冷える。あ、服を脱ぐ。あ、振り回しているうちに乾くだろうか。そうだ、裸で徘徊だ。いいぞ。こんなことをするのはあの日以来じゃないか？

かろうじて街だった場所の、もう行われない祭りの景色は。たのしかった。まだ私の心は。心は。祭りは。

祭りだ！盛大にぐるっと、大きなハリボテの女神をかついでゆくりゆくり回り回廊を練り歩け。最後は中央のドームで、ハリボテの女神を置いて、

何十時間もかけて手で壊そう。猥雑な、仄暗い気持ちに許される夜を踊り明かそう。

それぞれ好きな音楽をかけて、歌って、踊って、音が何重にも重なって、自分のしたいことだけをしよう。飛び跳ねて、恋も愛もあなたを縛りつけない。ここにいてもいい、いなくてもいい。カオスのなかで私だけがたしかにいる、乾いてもいい。あれ、もうない、どこに向かうの？

あ、間違えた！ここに来たらいけなかったのに！

最後の祭りの場所にたどり着いてしまった。しまった。目的地だ。赤い指輪と、死体がそのままだ。ここ、出来事と出来事と出来事と出来事からみあって、信号もないし、要素が多すぎる、高速回転で錯綜してる。

そうだよ、あの祭りは人が死んだので、死んだんだった。最盛期を過ぎた老人たちが見せかけだけの華やかさを作り出すために半狂乱になって無理をする老人が痛々しいのに若者は遠巻きに眺めるだけで中央のドームで押し合いへし合いになってバカなジジイグループがつつた壁のぼる酒をこぼして金を巻いてゲタゲタゲタ貼り付けたまま笑ったまま、歯のない老人。のつかまった絵。が抜ける。みんな笑って、最高潮に幸せだ——！と叫んでつ——と。死んだ。高い天井から落ちた人は助からない。

俺が蹴って殺した人も、冷たくなっちゃって魂はここにはもうないみたいで。落ちて死んだ人、の落ちている途中の光景を大勢が眺めるしかできない。悲しい未来は人の形をしていて、地面でクチャッ。死体になった。肉の塊になった。あつというまだった。その放物線を、僕は今も覚えている。

ごろつと。老婆の体。だれこれ。

僕がさっき殺したこの命と、あの時死んだ命は、それでも価値がイコールで繋がるの？

不健康な食生活を送っていたの？血がぬめって、ドロって、すべて。赤い。赤い。赤い。赤い指輪がまた手のひらにもどってきて、ベタベタ。

あ、これが。これが。これを持って帰らないといけないんだった。指輪。パ。パに頼まれたんだった。この指輪を思い出に生きていけないといけない

って、ないがしろにしてはダメだって。言うから。俺せっかく、でも。終わった街は捨てないと。この場所はすっかり凋落し終わって、巻き返すことはできないし。だって同じ人でさえ時間がたつと意見を変えるのになんかねじ曲がることを防ぐって、背負うって、なんの意味があるの？この街はいらないから廃れましたここには自分の気に入らないものを懲らしめたいって思う人が多すぎました時代は変わりました世界は善意で回ってるんです今までの何がダメなのかは俺にはちっともわからない。

あれ？これは俺の言葉？

あれ？人が死んだのに何を言ってるの？

俺、何も悪くないじゃん。なのに理不尽な要素が俺を苦しめるために飛び交ってる。過去と未来と今と罪が断罪のしかかる希望失望絶望ヌルヌルした赤い血がドロミたいに固まってカピカピに絡み合って動けなくなりそうだったから湖の水でせっかく落とすのにまたここに来て俺はまた自分の手をヌルヌルに赤くしてるから僕は何回もこの作業を繰り返してしまっ気がしてそれはとてもおぞましい輪廻だ。これは輪廻だ。輪廻にしまってもうどこにも抜け出せなくなっちゃったんだ。

間に合わない。

でももういいや、と思ったので、俺は外に出て、橋をつかつかと縦断して、湖の中、指輪を投げ捨てました。指輪は光ってどこかでカッーン、と音を立ってたあと、水のなかに、目には見えない場所にいつて、僕にはもうないのと同じになった。

あれ？

俺はいま、何を、して、しまったの？

次は何を背負わないといけなくなったの？

ペ。目障りな文字が目に入る。

この街の扉は多様性だ。人がその扉の扉でもあれば扉ごと、街の有り様が違ってゆく。

愚者は経験に学ぶ、賢者は歴史に学ぶ。協調に取り憑かれた愚者どもは、この街から個人それぞれが生きましますいぬい方を学ん

く。
たばれ。……あ、もう。くたばってた。とこの紙だけ持って、あとは燃やして、私は次の日に進んだ。

五、

ひと

…ヨーロッパ圏からきた異教徒

話しかけている相手…

異教徒

キビキビするよりも、の——んびり、がいい、そんな欲求ってあるだろう？
今がまさにそれ！

シートので、ざ、わ、りが大好きだ。とろ——んとスローなモーション
で、中指の触感を味わう。い、と、お、し、い。そうしていると、コロ—
——ンと布団から追い出された。おいおいヴァーナ、なにをするんだ
か！

とご機嫌なパートナーに語りかけ、ると、オーウ「ねえハニ——、もう
昼すぎなの、わかるでしょ？起きてっ！いつまでもベッドメイキングができ
ないじゃないの！」な——んてこと言われてしまったから、オーリョーか
いだって休日なのにくさくさ散歩に出ることになった。

そ——したら、オー——。外はスプリングブルーミング——って感じにリンゴの
花が咲いていて、気持ちいいなんてもんじゃない。いい日だ。グッデイ。
いい調子。ぐんぐん歩いてしまっような最高の日——そうしたらぐんぐん、
ぐんぐん、ぐ——んぐんと家から離れちゃった、これはもう、か、え、
れ、な、さ、そう。

そしたら頭がふ、や、け、て。ぼやけちゃまって。長い距離。もうろっつと、
景色も文化圏をいくつも超、え、て、いくのが楽しくて、「ここがどこだか？
わからない！

今？は、ん——そうだな。ボロ布をかぶって、変な味のスープをすすって
るさ。スパイスが癖になるんだ、じりっと。

この集落は、ちとぼろいがイスラム教の街と違って、牛肉も豚肉も食べら
れる所が、めっちゃめちゃイケてる！

いま？は、橋の下にねころんだ。ゴミ箱をひっくり返したような場所だ。
自分もゴミになった気分だ。なぜだろう、お、ち、つ、く、なあ。

おっと！まずい、足が臭いな？洗いたい。ついでに湖をのぞきたい。これは、面白い。古い街並みが水のなかに沈んでいた。歴史あり！

しかし困ったことも起きたんだ、ヨーロッパ人がこの寂れた観光地に住み着いたことはかなりセンサーシヨナルだったようだな子供が群がってきただんだ！体のあちこちをつねられてるジクジク痛む。おい、猿のような顔の子供達。やめてくれ。やめてくれ。やめないなあ。逃げてったなあ——

。ところでこの街はぼくの国の言葉がまったく通じない。なんて言ってる？さっぱりだ、今日も、次の今日も、次の次の今日も、ニヨラニヨラしか聞、こ、え、なくて、まい、つ、た、なあ。一昨日？くらいから、記憶がぼ、や、け、て、きているような鮮明に覚えているような。ゆ、ら、ゆ、ら大切な記憶以外の記憶が、いまみたいに、手触りのある、ゆ、め、の、よ、うな、いまを、つかんで、ふ、れる。日に焼けた看板、ゴミ箱をひっくり返したような町並みと人ごみ、地べたで愛し合う人、橋の上から人が飛び込んだ。その隣で、トボトボと何かを捨てている女たち。におい。湖は不思議な力でもかかっているのか、透き通ったまま。な——んだか、よくわからない活気がと、ぐ、ろ、を、巻いてる。人間は動物。いぶ、かしい煙、肉を燃やしてる？ゴミを燃やしてる？それが、す——

——と、落ち着いた。目を瞑る。ゆらゆらとした夢をよく見る、どちらが現実なのか、あ、い、ま——いに、なって、時間を排泄物のように垂れ流してスッキリして

ま、ど、ろ、みのなかに幼い教会での記憶が、ビビットに、蘇る。

鐘の音？つるさあい。窮屈なシャツ、すぎじゃなあい。すっぱいスープ、を吐き捨てているのはバシてない？「神様はあなたを見ている」って、どうして？「罪の意識を持つことが大切」それはなぜ？なぜ？ど、う、して？疑問、は下、ロ、ズ、ロ、に、と、ろ、けて、断片になって渦になった。か、み、の、けになったら、急——な速度で伸びて行っっちゃう！あ！起きないと気が狂ってしまう！

ても、空から、故郷から、糸を引かれてる、ちぎれる！頭に石を埋め込まれたのか？なのに僕は絶対に帰ることができない。

糸は切れない。振り払えない。気のままに帰るには途方もない距離を故郷から伸ばしてしまった。まともであるということは、当たり前ではなくて、一度外れることに慣れてしまえば。

いや違う！

おー、よかったまた今に帰ってこれた。もう暗くなってきたから今日は作業をもうやめだろ。外も気分も日がかげっている。と重くなった頭を少しもんで、黄昏時の、外に、歩き出した。

小便のあとが消えない土塀はくちやい。言葉のわからない民度の低い場所だなーんとなく落ちていた大便。きたないなあ！隣に寝てみようか。こーういう悪いことって、気分がさいこーうに、高揚する。

しゆるるるーと、水の音。水、毎日、少しずつ、せり上がってきている。ここまで透明な水はかえって毒々しい。

おっ！

また子供に囲まれた。

おっ！そのうちの一人とはじめて目があった。

おー！

どうして囲まれるのか、やっとわかったよ。怖くて、いなくなって欲しかったんだね。自分たちの全く知らない、言葉のわからない、金色の髪の毛が自分のテリトリーにいるのが生理的に嫌なんだね。わかるわかる。わ、か、る。

殴られて殴られて殴られて蹴られてつねられて、つねるの好きだなあ！つてじわじわと笑って、いたみ痛みい、た、い、あ、や、ふ、や、に自分の体をほ、う、き。

俺の思考の集合体でもあるあの大きな偶像が、何に使われるのか俺はまだ知らないまま気絶するように眠りについた。

神様にまだみつかってないといい、追いかけてこないで。

四、A

ひと

…客引き

話しかけている相手…

客引き

らっしやーせ！

らっしやーせらっしやーせらっしやーせー「うち来いよ馬鹿野郎！

あー！存外高いんだよ案外安いんだよ！どんぶらこー！船だよ船だよ船だよ船だよ……！

ダイコーヒョー！ベロリン濡れたコミツカスをイッサイガツサイおっ広げーたこの腐れーた田舎の皆々様様あー！いかがいかがいかがお過「しー？おっぱい伐採いっぱいどっさりの宝船屋さんだよー！

ロウなの？ニヤクなの？ナンなの？やっぱりニョー！を携えて貴方のギンギンとバツシヨビシヨをジュンジュンにさせたんでーとやって参りましたけどーね！無視！？

不況、不景気、お産、ご破算、絶望、失望、未来の見えない間かん坊さあ本日も本日も当店の雄犬どもも雌犬どもも、暴れるよー！ほろりんしてるよモロリンさせてよやってこーよーやってこやっことどんどん「いっつこ」ー

さあ揉みつつ揉まれつつ揉みしぐれて吸ってバキューム吸われてパヒューム幸せはどこなのって探しまわれよー！

あー！目が血走ったそのあなた！永遠にご延長もありますよー……！さーあーやっちゃってえ、やっちゃってえ、もんじゃってえ、開いて閉じてーやっちゃってえ、あーあなたのお、モーモンガあ、ビュンビュンとお。飛ーばしてえ、飛ーばしてえ、飛ーばしてえ、飛ーばしてえ！

はいはいはいーびしよびしよの1番ポート、ナジャンガちゃん濡れた2番ポートに行っちゃってちょうだい！

そこのくっさいお客様！行っちゃってちょうだい8番ポートのトックン君とギツコンバツタン「いじやってー！

さあ元気よくお尻ふりふりパイパイパッションで、はい、行っちゃって
行っちゃって！水がはじけるよー！

さあ6番、入りました女の子入りま——す！

はい、9番も男の子入りました——！出航！

いらっしやいませどつぞおー！

いらっしやいませありがとつございませー！

どつぞー！どつぞー！どつぞー！どつぞー！

さあ——！——！ありがとうございます！

当店は初めて？じゃあはりきっていきましようよ

さあ盛り上がっていきますか

ただとだけど 当店当店当店

野犬ちゃんに噛まれる文句だけはご勘弁だよ！

さあさあさあさあ参りましょう！

んやあ、死ぬまえには踊らないとね！

ドタマをかち割って腐りかけの酒に酔って酔われて酔いしどれてピロー

ドをひきさいて酔ってええじゃないか！

今夜だけあなたにトロロコンブがスプラッシュ！

さあいっちゃってええじゃないか！

今日がもうすぐ終わるよー！

遊んだってええじゃないか！

屋を燃料に、夜が燃えるよー！

あら、もうおかえり？とととと帰れ！ザブンとあちらで汚れを流して、

明日にいつといでー！

四、B

ひと

…物乞い

話しかけている相手…

物乞い

どうぞ……

めぐんで……ください……おかゆを恵んでください。

助けてください……助けて……。

……バカヤロー……ひとでなしども！くそくらえ！

お前ら人か？

人か？

人？

人が。人が。人が。人よ。人の群れ？たくさん？

ここだけじゃない。どこだって。そのそれぞれで、人には頭……？

頭に……思考……ある？思考……宇宙？みんな宇宙を持ち歩いて……？

かゆいかゆいかゆい！ナンキン虫だ！

お前の宇宙……私の宇宙……同じわけないのに。

お前の覗く色メガネと私の色メガネが同じなわけがないのに？

ナンキン虫だ！ドードー！

隣の憎しみ……私の憎しみ……つながらないの……。あなたの眠りと同

時に世界は眠らない……。ここはどこ？クソの隣にカレーがあっても気

づかない？理想主義者は博愛主義者は聖職者は見えないように。

ねえ……どうか！おめぐみを……おかゆを恵んで……。

……おい、あばずれ！

四、C

ひと

…市民

話しかけている相手…

市民

なに？

え、はじめてこの街に来たの？……んおー、その割に「この方言っぽい。けど、なに？

なんで？え？いまなにしてるってなに？

え？

いや、……みりやわかんでしょうよ。額擦り付けてるよ。これ？……レリーフ。レリーフレリーフ。なんで？まあ、伝統だからっ。

あー待って、あんたもどござ。え？だって、まあ、これをやるのがしきたり。しきたりだから。よしほら。

ほら！

うんうん。

あ、いや。でもなあ。

もう昔のしきたりになるかもしれないわね。

え？まあ、こっちおいで。おいで。ついでいで。

なに？

ああ、さっきの？……んー。時代がねえ、変わるかもで。もうすぐね。

なに？

なんで？んー。そりゃー。……死んだからなあ。

え？あ、末裔様。末裔様？つてのは、まあ、ここの……なんかの、王さま……末裔だったんだよ。なんの末裔なんだろうか？

でもひどいのよ。あれなんだっけ？ねえ！なんでだっけ？ほら、末裔様末裔様。死んだの。あ、謀反？え？エロ？……とにかく惨殺！だって、自分だったら嫌だよ？首、ドン！っとナイフでひとつき。血いー吐くわ。ギャー……！とか、バー……！とか、わめくわ。私もきこえるく

らいなの。ここから！あ、私耳遠いんだけどね。で、こと切れて、おわりだってよ。人ってのは怖いの。

んー……主族のいない王朝なんてありえないじゃん？

だからまあ、ナアナアに色々新しくなるんだろうけど、何が残るかわからない。ああ、ここね？そう、そもそも国だったのかもわからない。国って何をもって国なの？

ま、ま、ま、飲みなよ！

ねーえ、おいおい！こいつに一杯やって？
なに？

ばか、いっぱいってのは一杯だよ、いっぱいじゃない！タカカカカカ！
いやー、まつえい、って、ああ、え？何でそんなにきくの？あ、……
そう。よくわかんないけど、なるほど。

んー。死んで悲しいねえ。うそそそ。

だってねえ、臭いとか風呂に入れとかふしだらだとか、宮仕えの人間を殴る蹴るイビる蔑むで。よくわからんのよ。人はさ？汚れるし、臭うし、垢が出るでしょう？暮らしてるんだから！花の匂いしかない方がおかしくないかねえ？

え？

あ、こいつ？新入りよ。ね？

狙ってないってーあ、でも私。家、横。空き家になってたからそこに住まわそうかと思ってる――よ！

……ねえ、それでいいよ、ね？

いやー、あのひとは、なんちゅーか、変わったたのかな。会ったことないけど！いつか、城、壊れたときも。あ、壊れたんだけど。あ、あれ、城なんだけど。わかんないと思うけど。壊れた時もね？必要性がどうとかで、ぼろのままにして。ねえ、そのおつまみちよとちようだい。

あーたしか、おばさんも嫌いだったよね？

なんだっけ？あの……左右対称？なんか、まあ、こつちと、こつちが同

じような作りにすると、気持ちいい的な、なんか、わかんないけど！素
っ気なくてつまらない見た目の。ルールよ。

まあーあれだな！新しいものを尊敬できない人間は淘汰されるという、
教訓が、これでまた強いものになった！

だからま、ひとに教訓を与えるという、いい死に方だったってことさ
ね。

お。のむねえ。のみねえ。タカカカカ。

……いや、今日？そう、祝いよ。祝い祝い。祝祭。実は、おととい、み
んな引っ越してきたの。このへん。元難民。あ、私たちのことね。う
ん、

橋の下。あの、谷底。住んできたの。でも橋の下から湧き出る水、増えて
いってて、ジメジメしてて嫌なのよ。カビが顔を青くするし。家がどん
どん沈んでるから、もっと上にもっと上になって。こう、引っ越し。

あの水たまり、……もう湖。もはや？

私ねえ、おもうんよ。あの湖。船でも浮かべたら、ちょっといい商売に
なるんじゃないかってな。

……人が足りてないんよ。人が。……男手。ね？

いやあね！そのうち「こは」もともと湖だったんだべー」とか言うバカ
が現れるのかもしれないね。慣習とか伝統っていうのはな、私たちの先
祖がやったように。ぐいっと作っていくもんなのかもね。軽薄でいい
の。ありがたがるかどうかをどの世代も考えていいのかもね。

だからまあ、
なに？

大丈夫！勝機しかないビックチャンスよ。あんたは私と出会えて幸運
だ。

不安に思うだと？ハッ。新しい時代をひらくのよ？多少の不安はのりこ
えないと、実りのいい果実は食べられないからね？はあ？不安が淀んで
きた？いやいやいや、でもそれ以上に、何もないところに自分たちで新

しく決まりを作っている、そういうのってすごくワクワクしない？
しない？しようよ！

よし決めた、今日からお前は「宵闇の貴公子」だ。
のみほせ！「宵闇の貴公子」！ぐいっと！

今夜は、……ね？

ひゃ————！

希望がひらいていってるの。少なくとも私には。
空が広い。す————と、自由って感じ。

三、

ひと

…王様の末裔

話しかけている相手…

末裔

ね。

棺にべたつと頬をくつつけて、どこでもない場所をみていたの。

私の住む宮殿兼お墓な建物は、玉座の下に、階段が隠してあって、ここから先は私しか入ってはいけなくて。階段をしばらくしばらく下ると、真っ暗な石造りの廊下を歩いて、地下室に入っ。おびただしい数の石の彫刻でできた地下室にいる。大昔に死んだ人の入った箱。その箱を背もたれにして、ぼんやりまどろんでる。

人疲れをするところに来るのだけど、誰もこない場所が見つからなく、こんな不謹慎な場所でしか落ち着いてくつろげない自分が恥ずかしいと思っ。石の匂い。をぼんやりとかぎつつ誰かと対話がしたいという。思いを抱えて傷つけないでほしい。と祈りながらも柔らかい部分に触れて欲しい。そんな遠くにある理想の風景を夢に見て。

とか。まどろんで。いた。時があっただけ。

ダツゴン。と灰色の床から。髪がもじゃもじゃの人間が出てきやがりました。男かも女かもわからないし。こんなのはじめてだし。どうしたらいいと思っ。？

…、といえは、誰だ、と相手がつなる、いやいやこっちの言葉でしょうよと思いつつ。

ぴゃー！と声を上げて、上に逃げ出そうとジョンボラティラス調の扉に手をかけますと、ものすごい力で一旦引き戻されまして、石造りの床にバツホーンと倒されてしまった。

死にたいか？

冷たい声。どうしてこんな時に冷静な目をしてんの？は？いっそ死にたいのかもしれない、と思っただけど、とっさに左手で壁にあるレバーをぐっと引い

ていた。

ベゴン。と上からレンガが落ちる仕掛けなんです、モジャモジャの頭に直撃した。

そして私は再びぴゃー!と声を上げて、上に逃げ出そうと扉に手をかけて階段を駆け上がった。

モジャモジャが追いかけてきてる!追いつかれたくない!タットコタットコタットコと駆け上がって天井の扉に手をかける前に、一度振り向くと、モジャモジャのナメクジ人間が階段をずるとはっていた。え?足、悪いのかよ。と思いました。

あの、大丈夫ですか。とつい声をかけてしまった。大丈夫じゃなかったようで、とてもバツが悪そうかつぶつきらぼうに、手を貸して、とおっしゃった。ので手を取ったら。

ビビビビビ!と腱が切れそうなほどまた引っ張られてしまって、もんどり打って倒れました、ねえ階段の上にいる人を下から引っ張るような非常識な人っています?と、とても怒りに駆られたのでそのまま、ねえ階段の上にいる人を下から引っ張るような非常識な人っています?と怒鳴ってしまってた。

ごめん。

謝ったの。冷たい声で。引っ張るつもりでなかった、引き上げてもらうつもりだった。と続いた。対話を久しぶりにできたよう。な気持ちにさせられるといつもは噛み合っていない部分がピタッと。噛み合った。気持ち。

そこ、からは記憶が曖昧だけど、なんでだっけ?私はモジャモジャを抱きかかえてやわらかく、お持ち帰りした。地上に上がり、玉座の間に出て、祈りの間に群れていたサルを怒鳴ってなぎはらって、回廊を通るとオツ末裔様はお楽しみ中かあ?と大臣が吠えるのでクソしてあの世行け、と頭突きをし、孔雀を突き飛ばしてグギャア、床に赤い果汁をしたたせさせた女どものライララーという声を横をすり抜けて、つるーりと床を滑り、自分の寝室にモジャモジャをどっかっ。

どっかっといたずらっっぽく見てやるよ、モジャモジャは戸惑っように蠢いてい

夜中は馬鹿を喋らせるね。

もじゃもじゃ。もう眠った？よつゆ。いいにおいだよ！

……この、自分を取り巻く世界を魅力的に。感じられたら。よかった。んだけど。私にはそうじゃないの。

常識というのは、多数決みたい。私にとって非常識で嫌になることが、彼らにはそうじゃないみたい。文化の違いってやつだろうか。私は吐くくらい食べるよりも腹八分目の方が気持ちがいいし。営みはきれいに透き通ってるもの。ゴミがない場所が心地いい。数をこなすよりも、やわらかいところを交換しあえる人に会いたい。この感覚はこの辺りでは特殊そのもの。でも私のこの弱っちい部分が常識な世界が、きつとどこかにあるんじゃないかなあって。ここではないどこか。足があるんだからどこへでも歩いていけばいい、って頭では思えるけど。そんな時に決まって足に歴史が絡みついて、ナマリみたいに重くなって億劫になる。

……ここ。さわっていい？

モジャモジャしてるなあ、お前。

……犬。飼ってもらえなかったんだよな。私。

君はもしかして、あの時私を買えなかった犬の、かたち？

なのに、モジャモジャは何も言わなかったくせに、急に

イヌなわけあるか

って。私をつねる。もう、じゃあなんなんだあと笑って、ふたりで眠りについた。

あわいひかりがさした。ふーっと。人肌は暖か。くて。頭から。夢に。なだれて。あれ。夢の中でまた、棺にべたつと頬をくつつけて、どこでもない場所をみていた？

大昔に死んだお妃様、のに入った箱。その箱を背もたれにして、ぼんやりまどろんでた。

人疲れをするとここに来ていたのだけど、私分かり合えない下品な人々

は、もとはお妃様がどこから勝手にひきこんで来た難民達で、そいつらが

好き勝手に文化や建物をわやくちやに変えていく様をお姫様は嬉しそうに見ていたそう。

この宮殿も。難民たちの建て替えた部分だけ、壊れるのが早くて。嫌になるよ、まったく。直せーっていうけど、直し方を誰もわからないんだもの。だからそのままになってる。それは私のせいじゃないのに。

こんなところにいたんじゃ誰とも対話はできない。傷つくよ、根本が違う人はぶつかってくる。柔らかい弱みを見せたら大笑いだ。青い葉っぱを青いね、と言い合うだけでいいんだ。馬を撫でて、てのどかない雲の形を何かに例えて、気があって、くらくとする。そんな世界がどこかに。

とか。またまどろんで。いたら。

ダッゴン。と灰色の床から。また髪がもじゃもじゃの人間が。

モジヤモジヤは動かない私の足を掴む。今度は私は抵抗をしなかった。いい子だってわかっていたし。

ね。

するとモジヤモジヤはあつという間に私を灰色の床のなかにずりずりと引きずりこんで。私達はベシヤメルと音を立てて地面に落ちた。

……ここを知ってる。って思ったよ。

床の下に緑色の世界があった。

倒れている場所は天井が低いが、苔むす地面は緩やかな傾斜でフォーンと、下に下にと歩いていけるような平面で続いていて。その先にはなにかあるようだった。あわい光が見えて、ドドドドーンという音が聞こえる。

しばし。ぼんやりまどろんで。しまつて。いた。が。はつとすると。モジヤモジヤは蠢き蠢きと、下の方にはっていついていて、定期的に振り向いて来い来いという雰囲気を出している。

どこいくのー？と声をかけると、いいから来なさいというので。あれ、いつ寝たんだっけな、妙に質感のある夢だ。とついでにいった。

そのまま死ぬまでその場所で暮らした。

ありがとう！見つけてくれて。

誰かが誰かに怒ってた。「コメをおかずにイモ食うな」「豚を食うお前と仲良くなったたまるか」「その首の長さはすごいなんてもんじゃやない」…
…あとなんだったかな…。でも「そりゃ、ありえない！」と誰もがいつもおのおので、驚いてた。今もとなりの目の悪いガキがワー！って言うてる声のこってる。ワーってなんだよ。ってなあ。

ろくな出会いもないからつまらないし。最近死んだお妃様が、疲れてない女との男女合同飲み会をひらいてたけど、死んだし。男女合同飲み会は無くなっちゃうのかなあ？もうやだなー。でももう戻るところもないしなあ。とかなあ。不満タラタラで暮らしてたら、俺の家に妙に高貴っぽい女がやってきたんだ。

「ロロロロロロロ。左高麗さん。左高麗さん。左高麗さん。作っていたんだ。たいものがあるんですけど」

あの、まあ…。高貴っぽい女は宮殿の使いだ、お妃様の見た目の、でっかいハリボテを作れと言った。賞金も弾むし、ここからちょっと歩いたところにあるいかがわしいお店の回数券もくれるとか、そうだ、それよりも君が毎日来てくれよ、って俺がいったらなあ、へラって愛想笑いでた。かわいいかったんだあ。

俺は早速、それで毎日の仕事をほっぽらかして墓宮殿の中に通って、ハリボテを作ることにしたわけだ。

お妃様。どんな見た目だったか思い出せないが、目が冷たかったことだけが思い出されるから。テキストに作ってたらもう、ワイワイキャンキャン女が群がって来て「もっと目が釣り上がった！」「腹は出た！」「胸がこんなに大きくない！」「頬骨を突きだせ！」と嬉しそうにシッコイを勝手に奪って、ブスにしていって。女に嫌われてみたいだった。女に嫌われる女って、いいよなあ、いいんだよ…。エロい。

そんで俺の背よりももっとずっと高い、巨大なハリボテが2週間できたもんで。俺は走ってできあがりましたー！と高貴っぽい女に言った。そうするとまあーた女たちがハリボテのところに集まって、アチヨラ

間に置かれてたから、ハン！？と戸惑うわけだよ。

娘様がやって来てな。なにはじまんだ、ってみると。式典か？なにやら高貴な挨拶をして。式典でな。ざっくりなんちゅーか、

・ 今日から祭を毎年行います

・ お酒もお料理もございます

・ 母の偶像を用意しました、私のために壊してください

・ 壁に母の悪口を書いてください

・ 女性との性行為も自由ですが女性には猛毒を持たせてあります

・ 同意のない性行為は死に至ります

って説明だけして。あと娘様は最後にすくくカッコつけた顔で

ぬいか。ハハハは人種のるつぼ。信じてるものが嫌いで、決まりも意味をなさない。だが、だからハハハを認む。理解できない人間に出会った時に、優しげでできないなら、お前は死んだほうがマシだよ。

って！詭弁だよ詭弁。茶の間の詭弁。満足げだよ。

で……どうだったかな……

娘様の言葉が終わるとなあ、ドロフーンとトラがなる。祭りが始まる。

祭は最初の年だった。みんな戸惑い気味だった。ハリボテの中に酒があることがわかった。その途端に……わはは。男も女もハリボテを殴る蹴るしてぶっ壊し始めた。ちょびつと頑丈に作りすぎたんだ。手が痛い！という声が聞こえた。俺は隠れた。

しばらくダーボーバーンホー！やらなにやら、大騒ぎで弾けるように男女が走り回って、5人は死んだような。猛毒ってのはすごいんだ。ブスに作られたお妃様も、目に見えて粉々になっていった。

娘様。高い場所からケラケラケラー！と壊れていく様を笑った、だんだんと泣いてた。

あれもなんか、愛なんだろう。と薄っぺらな頭で思っていた。人には人の、愛と情の蓄積があって。好きだったのか憎んでいたのか、よくわかんなくなる時ってある。今の俺にはわからんが、わからんで済ませて、

邪魔をしたらいけないんだ。果物をホリツとかじったんだ。

夜……更けたな。モテなくてな……。猛毒も怖い……。酒……。飲んで飯食って……。ちよびちよと遊んで……。家に帰る。崖の上ではまだ声が響いて、火が燃えて、煤がふって、においがすきだった。さえない俺の仲間……。わらわらあつまってた。情けないやつらだ！また酒をのんだ。にぎやかな心地で眠ってな……。明日からまた左官仕事か、だるいなあ。

と。
困ったんだ。

祭がこーんなに。長い間長い間つづくことになって俺はジジイになって歯がなくなっても毎年あのドデカいお姫様を作らされる羽目になって。こき使われるなんて思わない。おまけに。

年々質が落ちるではないか。母はもっと羨しかった。

ってな。娘様。怒るようになって。女は変わる。生きてるお姫様を、もつとちゃんと見ておけばよかったなあと。思いつつ。

……みておけばもつとなあ。
なあおい。

あの祭りはな。馬鹿騒ぎをする言い訳じゃない。

このなかの、おまえたちのだれが今年の像を作るかはわからんがな。愛情を込めて、やんなさい。

それが轍になって、その道筋をまたお前たちのこどもがなぞる。

ほいじゃあの、解散。

一、

ひと

…王様

話しかけている相手…

王

きこえ

すか？　ます　こえ　すか　る？　きす　か？

聞こえ

ていますか。聞

こえますか。

きこえる？

きこえ　る　か？

聞こえ　てるんだろっ？

きこえ　ろ！

満を辞してきこえろ。

俺。俺の。

声。俺の恨み、怨念の残滓、有象無象がまざりあった声を。こんなことのために俺はとろけてきらめいて、ずっと「こ」で錆びひびいている。

おい！

俺の声、聞こえているか。

届いているか？

届いているのなら、長い長い、時をかけた俺を耳に運べ。

言い伝えろ、刻め、煮詰めて、泣きわめけ、寄り添って、忘れないで、継承を繰り返せ。

我が名は、俺。

喧嘩で俺に勝るものなどいない。喧嘩の王者、最強の小競り合い、縄張り争いの権化、覇権争い、戦、戦争、覇者。

俺のあだ名は、戦争隊長。俺。

権力を手に入れると視界が広くなるぞ、仲間はずらと繁栄と拡大のゲー

ムに夢中でせせこましがみつともなかったが俺は格が違った、色とりどりのフルーツを食べた、昼下がりにうたた寝だ、ヤギの群れはくさいぞ。なんでも手に入る日々を満喫してやったから。手に入らないものが欲しい！

そんな、俺。

気づいたらあの瞬間に飛び込んでいる。運命はすぐに歪む。あれほどの夜だ？荒野の中のテントの村、宵闇に松明が燃えていて、揺れる。誰かの踊るシヤラシヤラとした音が耳をくすぐって。たゆたう人波のなかで、目が吸い寄せられる女がいた。暗闇と火がまだらに眩しい、何も見えていないような目のなかに、火が燃えていた。浮かれるように気がつけば俺はその女を引き上げて、嫁として召抱えていたわけだ。

しかし。そんなことをなせしようと思ったのかと、今は問い詰めたいぞ。やっつとの思いで寝室に女を引き込んで、スルスルと布が床に落ちた頃に

どうして私をいじめてたの？

とか。女がカタコト。俺は、アッチ方面に、いそしみたい時に、いそしみたい相手に、囁かれると声が3倍でかく聞こえて逆に聞こえなくなるから。だから、俺は。えっちよっと何言ってるのかよくわかんない。よくわかんない？俺、止まったぞ。そうすると女。

私、羨しいわね、あなたも、自分も、おいたちも、いびじた。人より劣ってるのわかんないよ。

とか。

いや。

こりゃあ、面倒くさい。咄嗟に耳の裏がキュツとなった。が、いやいやこういう女性の浅ましい劣等感を慰むるも、持てる者の役目であると微笑み、俺。

いやいやいや、みんながってみないい、君の魅力を僕はみつけたのだよ！

どっだっというんだよー

女。

ほらあなたも「ノ」緒に

俺。

わーっなにを言っている。

新しい土地づくりにしも祈いませ。馴染みませませ。「ノ」。と。しませた。深い意味は知らないが、が、を言っているが。私の家には「ノ」を言っている土着のしきたりを遵守するのだから人から敬われ

いやいやうるせえよな。女っていちいちうるせえ。

女はおしまい砂漠にたどりついてもうるせえよ。

女、このなにもない、焦燥感を景色にしたような場所に、深い意味もない祈りを捧げるって？はっ虚しさで家が建つわ。いや墓。

墓。墓。墓を建てるぜ。墓。はまず俺の宗教の宗派であるジヨンドラニス派を基調として、いまだだんとトレンドの建築法になってきているフォットポトル建築法を採用して、うわ、ここは巨人の国かい？と誰かに言われたい。装飾はパパディレーヤ様式で、一見ゲドウンのようであり自然なライティングで、カンファタブルなものになることを目指している。

理想を形にする覇者が俺。そう、ざっくりとこういう仕様になった。まずはなによりのお気に入りである橋のはじまりだ。あの女の土着の意味のわからない祈りを帳消しにすべく、ここには俺の象徴である、俺の大好きな俺の顔を模様っぽく編んだレリーフが刻まれ、俺に尊敬する気持ちを蓄えるために額を擦り付けないと不幸になるぞ、という決まりをきつくみんなに守らせることとした。

橋。橋は若干深めの谷に頑張って渡すことになり、立地なんでここやねんとヒーヒー言う筋肉たち。かなり気まずいと思いつつ、落ちたら死ぬか？と言われれば、石を谷に落とすと20秒でコクーンと聞こえるのであせらないでもらいたい。

そして墓の玄関にたどりつく、あらびっくり、床はモダンなツグリムグリシユグリづくり、アंकシヤセラスなアーチの壁面にはファジーに守り神であるフニャプラジュたちが壁に彩られ、アーチを抜ければいきなり回廊がドヒヤーンと目の前に広がり、右に行けばいいのか左に行けばいいのかそのまま突っ切ればいいのかを悩ませる。そのまま行け。そのまま行った回廊の中には中庭がありヒバリ孔雀ペリカンピーコックが必ずケンカをするような仕掛けにしてあり、来訪者を戸惑わせること間違いない。

回廊を抜けると、中央にあるドンどでかい円柱型の処刑ホールがポンと現れ。ここは女が死ぬ様が日光で健やかに照らされないように陰鬱うすな作りを徹底させたく、ガタメキラ調の壁の作り方にしろときつく申し付けてある。

女を無事に死なせた後に、地下のザツツ死に場所、墓ルームにぶっこんで、バチーンと収納ハッチを閉めきって、椅子をがっつり置いて俺がバツツリ鎮座しますので、どでかい椅子を作らねばならない。

ちーなみに今までの専門用語の全て、俺がなんとなく作ったハットリ以上の何物でもなんでもない。フハハ。歴史なんて知ってる奴にしか価値を持たず、知らなかった奴は「へえー」と知ったふりをするわけだし、ならば俺が昔からあるんだぞ、という風に振る舞えばあつというまに「へえー」でなわけだよ。世界のカラクリを熟知している俺にしてみれば、しきたりなんちゅー見えないものなんてマヤカシだよ目の前のものを大事にしていけよとそついうことだ。

女。

西の方から流れてきた難民の、もつと仕事をする女の足音の音です。彼らは、あなたとママが冷たい心で強いのです。

俺。

……ええっ……いやあ。どつだろっ。決まりを破る、ツーツー歯笛を鳴らす、コメを手で食っちゃうとどつ……ああ……いやまあ、いいよ……いい……

でもねえ、この世にはいろんな種類の人間がいて、わかりあえない人間だっている。あ、そういう人もいてもいいと思うんだけどね？でもさ
女。

あなたに認めてもらわなくても、彼らは既にいるのに。傲慢だ。

いちいち腹がたつなあー！説教くせんだよーああもうーなんなんだ！
2年がたつのはオウムたつよりも早い。女はなぜまだ生きている？女の墓の完成が遅れに遅れているせいだよ！

いくら簡単に作るっちゅーても、砂漠の中で、3、4年もテント暮らしできるかー！と回廊の右側にかかるーく作った宮殿は、かるーく作れと言ったのにも関わらず、職人の中に完璧主義がいたせいで、くそー丁寧な時間をかけていい宮殿を作ってんじゃねえ……！女、貨幣を作るな……！経済ーをグルグルと、いい感じにまわすんじゃねーよ……！待ってくれ、国のような雰囲気になっていないか……？とゲンナリする……！死に場所を作ってるのになぜハツラツとするんだ！愚民ども、俺を王様と呼ぶんじゃねえって話だった。

……だった。

そうだったんだよ。俺は、愛されていた。

それでも。あれは夕方だったんだ。

2重3重の気持ちの軽くなる憂鬱にとらわれた俺、橙色の花の絨毯をしいた。絨毯の上、西日、珍しく女と並んで寝転がって、焦燥感に光り輝く血を垂らしたような景色をみた。お前の好きなザクロを運ばせたのに、笑いもしない。猫にはにやーって、甘い声。なんだよ。

そのときに、砂埃がかゆい。目が痛えーと俺が言うと、女が俺の目をじっと見てきた

ゴッ／＼は入ってないさびいみ

あ、そうっまじか。じゃあなんで痛いんだろ？

しつ／＼い

その二日後の今。俺は毒で死ぬ。しらないじゃねえよ。死にたくない

よ。

死にたくない！

だってこんな、だって、だって。思いが残った、今が永遠に続きちゃう？お前の言うヘリクツに答えられなくて。今。続く？

え？お前が言ったんだろ？あのヘリクツに答えられないなら、お前は俺を愛さないって。だから。ずっと。ずっと。ずっと。ずっと。ずっと。

お前より考えてきたのに。

ねえ、何度考えても、俺は俺から出られないし。俺が見たこともない何かを、えぐるかもしれない傷を、今はまだ考えられないよ！

他人を受け入れることは、血と骨をくたく、いっこいっこ、受け入れる直前に、体が嫌がって、痛みを知って、いてえから

ねえ。聞こえない？

お前！みじめなお前。気づかない？面倒くさい。よくわかんないことばっかり言う、そのよくわかんないことを考えてるうちにお前、こんな故郷から遠い場所で死ぬことになって、どうしてくれる！

毒を入れんなよ！俺、途中から気づいていたんだぞ。お前は俺のこと、ちよつとくらいは愛してくれてた？愛する気もなく、俺を利用して、新天地でこんなでかい建物を？

ひどくない？ひどい女。踏みにじったんだ。優しくない女！程度の低い心だ！徳もひくいぞ。思いやりに欠けて、憐れまれて、悲しくさせる。

でも、そこがよかったのに。

それは、お前らしさ。お前を形作るもの、そのものだ。だから、

俺をあの墓に入れないで！あれはお前のために作った。暗くて俺は嫌だなあ。俺の墓は。

そっだ！あの橋の下の。俺の勲章の真下。お前が跪いた、下。あそこに埋める。俺は自分の名譽と死にたいよ。

ああ愉快だな。ざまあみる！

未来に笑うのは俺。だってこの土地はこれから、お前の思い通りになんてならないのだから。水で潤って、生い茂って、蓄えて、溢れて、見渡す限りに全種類の理解できないものが集まる場所になるんだ。そしてむごたらしいものからつまらないものまで、全てがはびこる、朝焼けも夕焼けも宵闇も奇妙にしか見えない、混沌の地になっていく。

その混沌のなかで、お前のほざく理想が、たかが理想だったことを思い知れ！

この墓にウゾウゾと出来上がるは、おぞましきだ。好きなものだけが生い茂ると思っているのか？嫌いなものも大群でうごめくんだよ？蛆虫にも優しさを与えてよ、一個一個苦しんで、最終的に痛みに耐えきれずに死んで行け。それがおれのざまあみろ。

俺、ずっとここに居るの。ずっとここにある。ずっと見てる。見守ってるよ。

ねえ！なのに。なんでお前は俺を愛さないの？

涙も流さないの？

切り替えて、進んでいくの？

俺の知らない男を愛するの？それはだれ？

俺じゃないのはなぜ？

……う。

宇宙のみんな！俺を慰めてくれ！

俺の涙は乾かないから、雨にならずに流れ出して、この乾いた土地を濡らすだろう。

だって俺が一番偉いの！他はみんな横ばい！

……ねえ！

お前が俺だとこんなに悲しくないかな？

ねえ、お前。いない？誰もいない？音が聞こえない？
ないちゃうー！

……あ、過去の蓄積が手繰ると寄ってくる。洪水になって、ぐじゅぐじ

ゆに溶け出して、乾いてる荒野広がって。透明に恨んでいる。照り返し
がきつい？目の前がゴミが集約して、光であふれる？新しいはじまり
は、ちゃんと俺の頭を踏んだ。

ねえ！俺はここにいるよ。ずっと話しかけてるね。胸糞悪いあなた。愛
している、いた、あなた。聞こえていますか。

聞こえていますか。

聞こえていますか！

聞こえますか

いつ？

きこえ